

座長 新井 弘之

3. 正常人と血栓性疾患におけるアスピリン
超微量投与の血小板機能に対する影響

伊藤 粹子・真田 えい (新潟南病院)
渡部 透 (内科)
布施 一郎・服部 晃 (新潟大学)
第一内科

4. Eicosapentaenoic Acid (EPA)による
血液性状の変化

長嶋 勝・南雲 伸夫 (国立小千谷療養所, 神経内科)
大野 司・湯浅 龍彦 (所, 神経内科)
小池 亮子・小山 晃 (新潟大学)
宮武 正 (神経内科)
高橋 壮一郎 (長岡赤十字病院)
内科
鈴木 正博・川瀬 康裕 (同 神経内科)
渡辺 正雄・外山 孚 (同 脳 外 科)

座長 本間 義章

5. トロンボキサン合成酵素阻害剤 OKY-046
による実験的脳血管攣縮の予防

大杉 繁昭・石井 録二 (新潟大学)
田中 隆一 (脳外科)

6. 先天性異常アンチトロピンⅢ
「ATⅢ Toyama」の構造解析

小出武比古 (新潟大学)
第二生化学
高橋 薫・桜川 信男 (富山医薬大)
中検

血栓性静脈炎を頻発した先天性 ATⅢ 異常症の患者血漿より得られた異常 ATⅢ の機能異常をアミノ酸レベルで明らかにすると共に、ATⅢ とヘパリンとの結合に本質的に重要なアミノ酸残基を同定する目的で、異常 ATⅢ (ATⅢ Toyama) の構造解析を行った。

純化した異常および正常 ATⅢ をそれぞれブロムシアンで分解して得られた大小11種類のフラグメントをさらにトリプシンで消化し、高速液体クロマトグラフィーで分離した結果、83残基のアミノ酸よりなる CNⅢフラグメント中より異常ペプチドを単離同定した。そのペプチドのアミノ酸配列を決定したところ異常 ATⅢ では Arg-47 が Cys に置換されていることが分った。Arg-47 に対する DNA の塩基配列は CGT と決定されており C→T の1塩基置換が ATⅢ Toyama におけるアミノ酸置換の遺伝的原因と考えられる。また ATⅢ Toyama が heparin 結合能を全く失った ATⅢ であ

ることから Arg-47 が ATⅢ のヘパリン結合に重要なアミノ酸残基であることが示唆された。

帰 朝 講 演

司会 野村 穰一
スウェーデンにおける1年間の研究生活
山梨医科大学第二内科
小林 勲 助教授

特 別 講 演

司会 柴田 昭
キニンと血栓症
佐賀医科大学内科教室
斎藤 英彦 教授

第 8 回新潟血栓止血研究会

日 時 昭和59年 5月12日

場 所 上越医師会館

幹事 野村 穰一

一 般 演 題

座長 坂下 勲

1. 脳梗塞の血小板機能と再発について

高橋 壮一郎・荒井 奥弘 (長岡赤十字病院)
内科
鈴木 正博 (同 神経内科)
外山 孚・渡辺 正雄 (同 脳 外 科)
川瀬 康裕 (三之町病院)
神経内科

2. ウロキナーゼ療法における α_2 -PI の
変動

本間 義章 (佐渡総合病院)
神経内科
松林 俊衛 (羽茂病院)
検査室

目的: ウロキナーゼ (UK) の線溶効果は α_2 plasmin inhibitor を50%以上減少させないと期待できないが、脳梗塞に対して行われている現在の投与方法は α_2 PI をどこまで減少させるか検討した。

対象と方法: 新鮮な脳梗塞を対象とした。第一の方法は UK 2.4万単位をワンショット静注後、12万単位を2時間で点滴静注するもの、第二の方法は、第一の方法に

12万単位の点滴静注を更に10時間後に追加する方法. 第三の方法は12万または24万単位を1日1回ワンショットで静注するものである.

結果: 第一の方法では α_2 PI の減少率は25% (n=16, P<0.001) にすぎなかった. 第二の方法では 35.7% (n=9, P<0.01) であり, 5日間続けても有意な減少はみられなかった. 第三の方法では12万ワンショットで38%, 24万ワンショットで40%にとどまった.

結論: 現在行われている UK の投与方法ではその線溶効果は全く期待できない.

座長 渡辺 渡

3. 原発性血小板血症の2例

- Melphalan 療法の経験 -

飯泉 俊雄・村田 徹 (県立吉田病院 内科)
長山 礼三・服部 晃 (新潟大学 第一内科)

4. Psychogenic purpura の1例

小池 隆司・布施 一郎 (新潟大学 第一内科)
服部 晃・柴田 昭

特別講演

司会 柴田 昭

「組織プラスミノーゲンアクチベータによる血栓溶解療法の可能性」

近畿大学生理学第二教室

松尾 理 教授

第9回新潟血栓止血研究会

日時 昭和59年11月10日
場所 新潟グランドホテル
幹事 坂下 勲

一般演題

座長 坂下 勲

1. 急性心筋梗塞に対する PTCR 後の A-C バイパス手術の検討

春谷 重孝・竹内 誼 (立川総合病院 胸部外科)
坂下 勲
岡部 正明・大滝 英二 (同循環器内科)
松岡 東明

2. 急性心筋梗塞に対する冠動脈内血栓溶解法と経皮的経管性冠動脈形成術の併用

小田 弘隆・柳沢 善計 (立川総合病院 循環器内科)
小林 則昭・大滝 英二
岡部 正明・松岡 東明

座長 高橋壮一郎

3. 慢性期脳血管障害における血液粘度の日内変動について

川上 明男・湯沢 龍彦 (新潟大学脳研究所 神経内科)
渥美 哲至・宮武 正
長島 勝 (同 脳神経外科)

脳梗塞が就寝時及び朝方に多く発症する事実と, Ht, 血液・血漿粘度, 血圧の日内変動との関連をみた. 慢性期脳梗塞患者45名(穿通枝梗塞19名, 皮質枝梗塞18名, 皮質枝+穿通枝梗塞8名), 老年対照者15名, 若年対照者5名について, 10時, 16時, 22時, 翌4時の時刻に上記四項目を測定した. Ht, 血液粘度は22時に最小, 午前10時に最大となる日内変動を示した. 22時の値を100%とした時の午前10時 Ht 変動率, 血液粘度変動率は, 脳梗塞群が老年及び若年対照群より有意に大きく, また穿通枝群が皮質枝群より有意に大きかった. Ht 増加, 血液粘度増加は脳血流低下をもたらすと言われる. 脳梗塞群, とりわけ穿通枝群では夜間より朝方にかけて脳血流低下の程度が大きいと推測される. これらより夜間から朝方にかけて, Ht, 血液粘度の増加の大きいことも脳梗塞発症の危険因子となりうる可能性があると思われる. 血圧, 血漿粘度は明らかな日内変動を示さなかった.

4. 乳児ビタミンK欠乏性出血症のスクリーニングテスト成績

神田 綾子・梅田ひろ子 (県立ガンセンター 血液検査室)
桜井 友子・牧 ちづ子
山田 公作・堀水みさ子
渡辺 泰男

高橋 威・笹川 重男 (同 産婦人科)
内海 治郎 (同 小児科)
佐藤 正之・村川 英三 (同 内科)

5. 著明な DIC 所見を示した悪性高熱症の1例

真田 雅好・国定 薫 (新潟市民病院 血液内科)
曾我 謙臣・塚田 恒安
本田 拓 (同 外科)
岡崎 悦夫 (同 病理)

症例: 16才男子高校生. 屋外でのラグビー練習中に倒